
露路(ろじ)

時任 恭一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

露路^{ろじ}

【Nコード】

N9770Y

【作者名】

時任 恭一

【あらすじ】

この露路は行き倒れの場所？ それとも…。
うなされた夜。ぼんやりと霧雨に浮かぶ赤ちようちん。俺はあいつと出会った。

この露路は出発の場所？ それとも…。
流れ着いた居酒屋で、あたしはあいつと出会った。

大人のラブストーリーですが、ヤバくなってきたら、またムーン
ライトに移動することをご了承ください。

序章

またうなされた。

飛び起きる直前、決まって、あの女が俺の前にしゃがみ、拗ねたように唇を尖らせ、下から睨み付けてあの台詞を吐く。

悲鳴が轟いたのか、知るよしもなかった。ただシーツがべったりと濡れている。枕元の目覚まし時計を掴み取ると、眠りについてからまだ三十分も経っていなかった。

場末の露路にあるアパート。二階の角部屋。隣の間棲カップルの艶かしい微震も、真下に住む初老の大家が酒に酔って上げるだみ声も、今夜は伝わらない。カーテン越しの雨音が俺の荒い息に入り雑じっている。呼吸が若干落ち着いた。鼓動が正常時になる実感が得られるまで、首をさすりながらじっと頂垂れる。もういいだろ。俺はまたカーテンを見上げ、ゆっくりと起き上がった。起こされた直後よりも、雨はおだやかになっているようだ。破れた雨どいからぽたぽたと、一階の軒に落ちる雨水の音の方が窓や道路を叩く雨音より大きく聞こえる。

布団のそばに転がったりリモコンでテレビをつける。六畳の部屋、明かりはこれで十分。部屋の隅のパイプハンガーから取ったタオルを首に掛け、深夜のバラエティーだろうが、テレビからケタケタ漏れる笑い声を背に、俺は洗面所へ歩き出す。

大量の水を蛇口から出し、飛沫を上げて顔を洗い、Ｔシャツを脱ぎ捨てて、シャワーを浴びるほどでもない、汗で湿った体を乾拭きした。こんな夜は今夜だけじゃない。あの女のあの台詞とあの顔付きには長い間、悩まされてる。

昼間は、着心地のよくないスーツに身を包み、聞こえだけいい広告代理店勤務の俺。仕事の内容はキャバクラ、ホストクラブ、ピン

サロにヘルスの求人や営業広告の斡旋。その風俗店専門の広告屋の社長は、俺が以前、住み込みで働いていたパチンコ屋の常連客。煙草をくわえながらスロットを回す老人が「兄ちゃん。いい顔してるな。よかつたら、うちに来ねえか？ ベテランが辞めちまって、俺一人じゃどうにもなんねえんだよ」とホールでドル箱を運ぶ俺に声をかけてきた。

高校を卒業してすぐ東京へ出てきた。パチンコ屋の店員以外にも、道路工事、デパートの警備員、ビル清掃等々、ねぐらも日比谷公園から始まって三谷の簡易旅館を転々。「可愛い顔してんだね。坊や」とボーイとして雇われたスナック。初日、仕事が終わった後、その店のチーママから「住むとこなかったらうち来ない？」顎を長い指でさぞられながらブランデーの香りがする吐息を吹きかけられた。

直立不動の俺はお言葉に甘えて、三十路を踏む彼女のマンションでセックスと金に困らない、半分ヒモのような生活をさせてもらったけど、若いがゆえの飽きと萎えは、いくら楽しくても来るもの。

住み込みで働けるパチンコ屋の仕事をを見つけ、黙って彼女の下から去って三年が経っていた。どうせ長続きはしねえと思うけど、また気分転換でもするか、社長の誘いに乗り、大家と知り合いということのアパートも社長の世話で入った。

気持ちのどこかで人恋しかったのか、常に誰かと顔を突き合わせられる営業という仕事が性に合っていたのか、また転職するのが面倒臭いだけなのか、それとも、どぶ板に挟まれ、湿気ったこの露路が俺の行き倒れの場所なのか、もうここへ来て五年になる。

鉄製のアパートの階段を降りると、ここに移り住んで以来、うなされた夜によく行く場所が同じ露路沿いにある。起こされる時間によつては閉まつてるけど、今夜はまだ空いている。霧雨の中、赤ちようちゃんがぼんやりと浮かんでいた。『あかね』と黒字で書かれた白地の暖簾を捲り、格子戸を開ける。小上がりもない、L字のカウンターに十人も着けない、小さな居酒屋。

「いらつしやい」

口紅なんて付けなくても、綺麗な笑顔で迎えてくれる彼女、あかねさん。今夜も白い割烹着と上げた髪に水色のかんざし。それは誰かの贈り物だろうか、初めてここに来た夜からそのかんざしは変わらない。熱爛の湯気の向こうで涼しく微笑み、目を反らし、耳元のほつれ髪を直す彼女には赤よりも水色のかんざしがよく似合う。歳にして彼女は……想像するのはやめとこ。

「また寝られなかったの？」

俺が何を最初に注文するか、あかねさんはよく分かっている。お通しを出す前に、一升瓶からコップに冷酒を注いで、カウンターに置く。

喉を鳴らしながら、俺は一気に冷酒を空け、一息吐いて、「おかわり」とコップをカウンターに叩きつけた。

「お兄さん！」

空いたコップを見詰めたままだった。あかねさんはこんなしゃがれ声じゃない。

「飲みっぷりいいね」

俺は声の方へ顔を上げた。女？ 他の客の気配はしてたが、性別まで分からなかった。

ここに来る夜は他の客なんて気にしたことなんてない。他の客も俺なんて気に止めない。あかねさんの色気を抑えた飾らない性格も手伝って、張り上げる笑い話と肩肘を突く愚痴話をしに来る女の客も多いが、俯いたまま一人黙って冷酒をひたすら飲み明かす、目の下に寝起きの隈を残す男になんて誰も興味を持たない。持つ訳がない。

歳にして…俺よりちょっと年下、二十五前後。少し茶色く染まった髪を無造作に束ね、グレーのチュニツクから鎖骨を浮かせ、カウンターの一番隅に座る女。ここで、あかねさん以外の誰かに声を掛けられのは初めてだ。

俺とその女だけ。他に客はいない。格子戸のすぐそばに座る俺は

「どうも……」 見ず知らずの女に苦笑いじみた会釈で答える。

「よかつたら……こつちきて一緒に飲まない？ お兄さん」

もつと元気で喋りの上手い奴が来るまで待ったらどうだ？ 俺は

役不足さ。

「あ、い、いや……」

愛想笑いで俯く。

仕事で染み付いた営業職の断り方をした俺だけど、「こつちいらつしゃいよ」とその女に熱燗のとつくりを運んだあかねさんはついでに俺のお通しを彼女の隣に置いた。仕方ないか。カウンターに両手を突いて重たい腰を椅子から上げた俺は彼女の隣に行く。まだ重たい腰を椅子に下ろすと、二杯目の冷酒が来た。最近の仕事でキャバクラ嬢やヘルス嬢に会釈するぐらい。二十代の女の相手なんか久しぶり。

カウンターのの上にはまだ熱燗と冷酒、二人分のお通しであるきんぴらごぼうしか来ていない。カウンターの中、あかねさんは微かな笑みを浮かべて包丁を磨いでいる様子。酒以外の何か、注文するか。「いそべ揚げ……」

彼女と初めて目が合う。

「二人分。俺の伝票に付けといて」

こんなもんでいいのか？ また苦笑いが浮かんでいたと思う。まだ口を付けていないコップに手が伸びると、「ありがとう。お兄さん」とまた彼女と目が合った。

「まだ名前言つてなかったよね」

名前？ 聞いても言つても今夜だけになる。

「あたしは……あすか。こんな字だよ」

熱燗を注いだお猪口に、爪が真っ赤に染まった白い指を浸け、カウンターに文字をかき始める彼女。

「明日が……香るって書いて……『明日香』だよ。初めましてつと彼女……いや、明日香は俺のコップにお猪口を付けた。

最近、名刺を使ってしか自分の名前を名乗らなくなった俺。変わ

った自己紹介。今夜だけでも印象に残りそうだ。真似てみるか。俺も冷酒に指を浸し、「俺は透明の……」とカウンターに自分の名前を書く。

「透。一字でおる」

微笑みを上げた明日香。口に付きかけていたコップを止めた。

「宜しく」

流れ着いた露路の居酒屋。それが、あたしと透との出会いだった。

夜光灯

格子戸が開き、雨で髪を湿らせた男が店に入ってきた。誰かに追われてるの？ そう思わせるほど、切らす息と青白い顔。あおったお酒も鎮静剤にならず、肩を上下させ、まだ落ち着ちつかない様子の彼。カウンターに顎杖を突きながら見詰める、あたしの存在に氣付いてない。女将は目を細めて口元をきゅっと上げ、大丈夫だからと言わんばかりの合図を私に送った。

夕陽が照りつけ、カーテンと同じ朱色に染まる部屋。重たい頭をベッドから起こすと、ビールの空き缶、バーボンの空瓶、コンビニのお弁当箱にスナック菓子の袋、深夜から今朝に掛けての残骸が床に散乱していた。

爆発した髪を更に掻き乱してベッドから両足を下ろす。キャミとパンツ姿で、ゆらゆら、力なく床に座り込み、テーブルの上のタバコに手を伸ばす。残っていた最後の一本をくわえ、空箱を捻りつぶしてゴミ箱へ投げた。上手く入らなかったけど、気にせずタバコに火をつける。吹き上げた煙が天井に漂い、その薄い膜も朱色に染まった。不味い。一服しただけで、タバコを灰皿で揉み消した。

駅と繁華街に近くて便利だけど、車と電車の音が少しうるさい所。半年前、最後の男が出ていってから片付けても、すぐに散らかる。特に、深酒した次の日は悲惨。よくこれだけ飲んで食べたもの。一人薄ら笑いを浮かべ、ベッドの縁に片手を突いて体を起こし、シャワーへ向かう。仕事が休みの日はこんなもん。

シャワーの後、部屋着が普段着か分からないチュニツクのトレーナーを被る。ドライヤーで乾かした髪を適当に束ね、薄く化粧をした。もう部屋は薄暗くなってる。わざと色落ちさせたジーンズを履き、携帯とミネラルウォーターのペットボトルを投げ入れたバッグ

を肩に掛けた。映画？ 買い物？ 一人きりで行く当ては別にないけど、部屋にこもりたくない気分だった。

特別、見たい映画はなかったけど、適当に映画を見て、欲しいものはなかったけど、形だけの買い物もした。ビルの谷間に、交差点に、駅前、無数の人がひしめき、忙しく、騒がしく、又、虚しく足音を響かせる都会の夜。少しでも避難しようと、潜った地下街にも、ぶつかる肩同士、振り返って先に謝ろうとしても、もうその人はいない、冷たく乾いた空間が凍みていた。ここも駄目。すぐに地上に出た。

人気が無さそうに見える場所に、ふらふら、ぶらぶら、入り込むけど、決まって何も無い。溜息をついて、また雑踏へ戻る。あたしは何を探してるんだろ？ 答えが見つからないまま、自問は誰かがあたしの肩にぶつかり、消し飛ばされていく。

ファーストフードで食欲不振のままに晩御飯を済ます。時計を見ると、もう十一時近い。帰るつもりが、JRではなく、今夜……開いてるかな、爪先を回し、私鉄の乗り場へ、歩く方向を変えた。

夜空に突き刺さる真っ黒な高層ビルが急行電車の窓から見える。てっぺんに灯る赤い夜光灯を窓からぼんやりと眺めているうちに、一つ目の駅に着く。改札を出て、駅の階段を下りると、ぼつと鼻先に冷たいものが落ちた。鞆を頭に乗せる人や鞆から折り畳み傘を出す人、それぞれ散っていく人達の中で、あたしは駅前のコンビニへ駆け込み、ビニール傘を買った。

雨の中、所々に、飲み屋、小さな雑貨屋、本屋、食堂の灯りが滲んでいる。ギラギラ下品な色を発するネオンの列と列の間に、人波が押し寄せる新宿。そこから電車で五分もかからない所。ここは、混雑さにつられて胸に溜めた息をぽつと吐き出せる、そんな都会の休憩場所。

水溜まりを避けながら、とことこ、しばらく歩くと、ぼつぼつ灯

る店の明かりもなくなり、街灯だけの夜道に。そして、あの露路が見えてきた。開いてるかな、もう一度、心の中で呟く。ビニール傘に弾く雨の音が激しくなる。一番最初ここへ来た時に吠えられた番犬も今夜は小屋に入ったまま出てこない。小屋からあたしを見上げて、くん、と寂しい声を出している。ここを過ぎると、あの店がある露路の角。開いてるかな、今夜、三度目の呟きと一緒に角を曲がると、今日、部屋を出てから初めて笑ったかも。雨に濡れる赤いちようちゃんが薄く灯っていた。

二回だけ私と目を合わせ、コップのお酒を半分ほど飲んだ透。黒いＴシャツの袖を捲り、肩を掻きながら、何を話そうか、目玉を左右させながら口をカクカク動かし、困っている様子。

女の一人酒に目を付け、呼んでもいないのに寄ってきて、聞いてもないのに、俺は……俺が……と自慢話を並べる今時の男どもとは違うと第一印象で感じた。どんより不器用そうな透は逆に新鮮に映る。

ぴちぴちと油が弾く音がカウンターの向こうから聞こえる。いそべ揚げの香ばしさと合う熱燗を一口飲んで、まだ肩を掻き止まない透に質問をする。

「仕事、何してる人？」

きっかけはあたしが作ったんだ。その後もあたしが責任とらなきや。

肩を掻く手を止め、チラッと私を見て、透はまた目を反らす。

「普通の会社員」

自己紹介の次は職業を聞く。ごく普通の会話の流れ。

「君は？」

初めて、透から話してくれた。うつすら笑い、カウンターに肩肘を突いてお猪口に残った熱燗を口の中に流し込む。

「普通のフリーターだよ」

気は利くんだね。とつくりを取り、透はあたしにお酌してくれた。「ありがと」と軽い感じで言っても、「ああ」と返事するだけで、目は合わせてくれない。あたしはの甲で口元を拭った。次の質問に
いこう。

「何処に住んでるの？」

「ここのすぐ近く」

俺は格子戸に顎を向け「隣の……隣の隣」と一つ間を入れてアパートの方へ差した。

「君はどこ住んでるの？」 少し熱爛が残ったお猪口を置き、カウンターの上で両腕を重ねた明日香。

合った視線。今度は離さないように堪える。油の弾く音が止む。浮かんだその笑顔は、初対面の相手に送る、作り出しの愛想を若干感じさせる笑顔ではなかった。細く手入れされた眉を和らげ、薄い口紅が付けられた唇の強ばりが抜けた。

「ちよつと、遠い」

視線を合わせたまま、明日香がお猪口に手を伸ばした。

「おまちどうさま」

あかねさんが二人分のいそべ揚げを盛った皿をカウンター越しから運んできてくれた。

「食えよ。ここのいそべ揚げ美味いんだ。いつも、つまみはこれだよ」

コックが家で料理を作らないのと一緒に。普段、喋って笑ってお客の機嫌を取る営業マンも仕事を離れれば喋らないもの、笑わないものの、と堅物になっていたかもしれない。

手を合わせて「いただきまーす」と言っ、まだころもに油の小粒が弾くいそべ揚げを割り箸で摘まんで、上向きにした口の中に、熱いだろそれ、入れた明日香。

「あふ、あふ、お、ひしい、おひしい」

ここは熱爛より……。冷酒が入った自分のコップを明日香に差し出した。明日香は一気に冷酒を口に流し込んだ。

しやがれ声は酒にやられたせいかな？ 結構な酒豪だ。

「いそべ揚げも、お酒も最高！ 女将さん。冷酒もう一杯。あたしの伝票につけといて」と明日香はあかねさんはコップを振った。

あかねさんは、こっちに座ってよかったでしょ、と言わんばかりの笑顔を送ってくれた。

確かに、あの悪夢は俺から消された。この夜はずっと。

やかましく鳴り響く目覚まし時計。その連続音が鼓膜と痛い頭を震わす。布団から手を伸ばし、叩いて止めた。ここで二度寝は遅刻を招く。やけくそに、布団を捲ると同時に上半身を起こす。カーテンを透かす朝日が吐き気を誘う二日酔いの朝。

あれから、明日香とよく飲んだ。俺は冷酒のみだったけど、明日香は、確か、熱燗からバーボンのロックに切り替えた。

「彼女いるの？」

「あたしも彼氏なんていたらここで一人酒なんてしてないよ」

「寂しいもん同士、今夜はとことんだからね。透」

本当に久しぶりに、俺も調子づいた。かなり酔っただけからの会話はあまり覚えていない。おぼろげな時間だった。けど、明日香が「約束だよ。透」と小指を絡めて閉めた事柄。そして、生暖かい呼吸と体温の中で、俺の下や上でしやがれた喘ぎ声が響いていたのは……よく覚えている。

もう明日香はこの部屋には居ない。酔った女を持ち帰ったのは初めてじゃない。でも、本当に久しぶりにやっちまった、と後頭部を撫でた。石鹸の匂いと湿気が漂っている。普段は壁に立て掛けてある小さなテーブルが部屋の真ん中に置かれ、まだ薄い湯気が残るコーヒーに添えられたメモ書き。布団から抜け出た全裸の俺はそのメモを拾い上げた。

冷蔵庫の中に、ビールしか入っていないもん。可愛らしく朝ごはんも作ってあげられないじゃない。シャワー借りたよ。じゃあね。

一夜だけ。そう思うのが無難。ごく普通の男の発想しか持たないでおこう、と思ったけど……。

一夜だけで。それでいい。まだラッシュ前の電車で揺られながら、ごく普通の女の発想をひとつとしたけど……。あれ？ ああのビルの夜光灯、まだ灯ってる。

写真

整髪料、化粧、香水、脂汗の入り雑じった臭いが籠り、おたくらも大変だね、と皮肉でも言ってやりたいぐらい、駅員がドアから溢れた人をこれでもかと押し込んでくる満員電車。俺の背中に密着する、柔らかい二つの感触は心地いいとしても、久々の二日酔いを宿す体には、結構大変な通勤。

新宿で私鉄から山手線へ乗り換え、会社の最寄り、五反田へ。電車は変わっても混雑は変わらない。変わったのは後ろに居た綺麗なお姉ちゃんが年増に変わり、背中に感じる弾力が萎びたぐらい。車両のドアが開き、噴出する人波に乗ってホームに降りる。その濁流に飲み込まれながら階段を下りて駅の改札へ向かう。コンクリートの通路を叩く無数の足音が酒でただれた胃に響き、痛い頭を揺さぶる。改札を抜け、駅から脱出し、ようやくありつけた新鮮な空気を吸い込むと、どっかの馬鹿野郎が俺の背中にぶつかり、その衝撃で込み上がった胃液を吐き出す寸前に飲み込んだ。

緑に濁る川沿い。くすんだベージュの外観で一階はゲームセンター、四階建ての雑居ビルには名も知れない、そして、得体の知れない小さな会社が幾らか入っている。他社の評価なんてできない。世間から見れば俺が通う会社もその一つ。二階の窓一面に貼られた社名『藤田企画』が、その会社。周りに誰も居ないことを確めて新鮮な空気を吸い込んだ。築三十年を越す小さなビルにはエレベーターなんてあるわけがない。一階のゲームセンターの脇から伸びる、狭くて薄暗い階段でいつも会社へ上がる。朝から、ピコピコ、賑やかな電子音を鳴らす、そのゲームセンターは嫌でも目に付く。階段の上り口で中を覗くと、今日も朝から彼女は来ていた。白髪に黒髪が混じる彼女は周りにいる同年代ぐらいの老人達と楽しそうに一緒にコインゲームをしている。向日葵だったり、朝顔だったり、彼女が

着るブラウスの柄と他の老人たちの顔ぶれは変わるが、彼女自身は変わらない。俺が出社する時も、外回りに行く時も、外回りから帰って来る時も、じゃらじゃら、彼女はひたすらコインを玩んでいる。階段の手すりに掴まりながら二階に上がった。透きガラスがはめ込まれた薄っぺらい木製のドアの前で、俺は鞆を小脇に挟み、シャツの第一ボタンを締めて緩んだネクタイを上げた。ふー、っと息を吐いてノブを回す。

「おはようございます」と一声し、事務所へ入ると、正面奥、黒革の椅子がくるつと窓からドアの方へ向いた。

「よう！」

臍脂のカーディガンを羽織り、くわえタバコをした社長。書類の散乱する机越しに軽く手を上げた。長い一日のはじまりはじまり、俺は会釈して自分の事務机に向かう。

社長と俺、そして、ピンクのカチューシャが浮き、度のきつそうな黒縁メガネがよく似合う四十代の事務員。三人だけの会社しては余裕が有りすぎる事務所。その広さとそれぞれの無神経が災いし、決して綺麗とは言えない。「もう少ししたら、また人入れようと思つてよ」と社長は俺が入社した時分に言っていたが、結局、見捨てられた三脚の事務机の上には古新聞や段ボールが山積みになれている。一日五箱は吸うという社長のタバコのヤニで黄ばむ壁。気が向いた時にしか掃除しない事務員の所為で、床は所々に黒ずみ、机や書類棚に積った埃が咳を撒かせる。「ゴミ出しはあんたの仕事だからね」と俺が事務員から押し付けられた仕事をさぼるから、今日もそれぞれのゴミ箱は溢れ気味。

斜めに入る朝日が窓に貼られた社名の影を縦長に伸ばす。社長が吹かすタバコの煙がその影と影に入る光線に照らされ、渦巻き、旋回する。毎朝の眩しさも匂いも、酒が残る今朝はやけに鬱陶しく、俺の向かいに座る事務員が黙々と叩く電卓の音も耳障りだ。

「二日酔いの目だな。女絡みか？ 透」

社長が灰皿でタバコを揉み消すと、事務員がずれた眼鏡から俺を

一瞬見て、ぐすつと笑った。

はい、そうです、と明るく正直に言える気分でもない。

「ただの飲み過ぎですよ。そんな浮いた話は……ないです」

俺は苦笑いでごまかし、今日は早く外回りに行った方がいい、鞆から手帳を出して今日のスケジュールをチェックした。よかった。

朝一番で訪問希望のスポンサー（広告主）が居た。毎週のように新聞広告を更新するスポンサーで、駅近くの店舗型ファッションヘルス。

ゆとり感のあるホテルやデリヘル等の呼び寄せ型に風俗の主流は移りつつあるが、仕事途中や一杯飲んだ後に気軽に寄れて、しかも写真で好みの子を選べる、より即効性と確実性がある店舗型は未だに根強い人気を持つ。

広告屋としても、一ヶ月以上も広告を放置しておいてもそれなりに客が見込める呼び寄せ型より、今週はこんな可愛い子が入ってますよ、と客を呼ぶ手段として、毎週のように、スポーツ新聞、風俗雑誌、ウェブサイト等の媒体に載せる女の子の写真やプロフィールを更新してくれる店舗型の方が金になる。

「行ってきます」

椅子から立ち上がり、俺は鞆を脇に抱えた。

「おう。今日はあんまり無茶するんじゃないぞ」

余計な気遣いしてくれる社長はまた軽く手を上げ、タバコに火をつけた。事務員はずれた眼鏡を中指で押し上げ、無愛想な顔を一瞬見せただけ。何にあんたは幸せを感じて生きてんだ？　まるで、自分自身に言いたい文句をまだまだムカつきを繰り返す胸に呑み込んで会社を出た。

階段を下りてビルを出ると、ネクタイをずらし、シャツの第一ボタンを外してまた新鮮な空気を吸い込んだ。通りすがりに、一階のゲームセンターへまた視線を流す。彼女は隣の老人と楽しそうに話しながらコインゲームをしている。もう深呼吸はいいや、俺はシャツとネクタイを直した。何にあんたは幸せを感じて生きていくんだ

？ このムカつき。今日は一日続きそうだ。

駅近くの風俗街。五年前に比べれば、ピンクを浮かばせるヘルス系は減り、代わって紫の灯りを放つキャバクラ系が目立つ。どの系統でも、俺にとっては大事なお客様。俺の業を知っている、店頭に立つ呼び込み達の中には向こうから笑顔で頭を下げてくる連中も少なくない。朝からここを通る時は、おはようございます、と口まねだけして、軽く何度も頭を下げながら歩く。男が欲を放出し、女が望を手に入れる、ビルと高架の影に隠れた都会の一面なんて、性にも金にも不自由していない奴らにとってみれば、あるうが、なかるうが、どっちでもいい場所かもしれない。アスファルトの路面と店先に出された空のビール瓶のケースには、まだ昨夜降った雨の湿り気が残っている。

今まで気付かなかったが、ここにも露路があった。

ビールケースの上で日向ぼっこをしていた野良猫。俺を見上げるなり、飛び起き、派手な店に挟まれた露路に駆け入った。立ち止まって目を凝らしても、暗くて奥は見えない。白い尻尾を暗闇に消した野良猫はこのまま行き倒れになるのか？ また光の下に戻ってくるのか？ 足元を見て、ふっと溢す。またどうでもいいことを考えてしまった。

ネオンは午前中であっても、ぼつぼつと行き交う男達の下半身の為に、寄っというで、抜いてきな、と必死に灯りを振り撒く。

「透ちゃん！ あとでうちにも寄ってよ」

得意先のキャバクラの前からオーナーに声を掛けられ、「はい！」と頭の後ろを撫でた。腕時計を見て、まだ時間がある、とそんなに広くない道路を小走りに渡り、立ち話をしに行く俺はどこからどう見ても真面目な営業マンなのかもしれない。

女の子達の首の上下運動を、じゅぱじゅぱ、より過激にするタテノリの喧しいBGMが鼓膜を揺らし、おしゃぶりの前後、彼女達が、

くちゅくちゅ、口の中を綺麗にする消毒液の酸っぱい臭いが鼻腔を突く。騒音と異臭が狂おしく混合されるのはこの店だけじゃない。どのヘルスも一緒。黄色い照明に色付けされた受付カウンターの前しかめっ面になりそうな表情を無理矢理、笑顔に変え、「こんにちは」と中に居る店員に一礼した。別に名乗らなくても、俺を誰だか知っている店員は「ちよつと待ってくださいね」と言い残し、カウンター内のカーテンの中に入ると、すぐに、馴染みのオーナー店長、坊主頭に顎髭の小池さんが出てきた。この間のバックスバニーのプリントよりまだましだけど、銀のラメが入った白地のシャツに、相変わらず派手好みだ、紫のスラックスを趣味悪く合わす。歳なんて聞いたことないが、ベルトの上に垂れ下がる腹、もう五十代には乗っているだろう。

「透ちゃん。お世話様」

初めて、このオッサンに会った時は一見怖い業界の人と思わせる形相に、まずい所に来ちまった、と萎縮された。しかし、甲高い声で喋り始めると、細い眉が八の字になり、鋭い眼光がネズミの尻尾のように変わった。

「こちらこそ…お世話になってます」

深々と一礼し、頭を上げると、分厚い金の指輪がはめられた小指を唇に付けて、ふっふふふ、と笑う小池のオッサンは腰が柔いのを通り越して、おネエ系が入っている。

改めて、人は見かけじゃない、といい意味で実感した。

「相変わらずう、可愛いんだから。透ちゃん」

でかい腹をカウンターの縁に食い込ませ、小松さんがその妖面を俺に迫らせる。引きたい気持ちを必死で抑え、俺は鞆を両手で握り締め、どうも……、みたいな感じで笑顔を作った。

こういう系統の店には色んな客が来る。下手な因縁付けて、女の子に無茶なサービスを強要する客には、この形相と風貌が役に立つ。小池さんは店のオーナー兼守り神。良し悪しで、俺は、その守り神

に好かれてるみたいだ。

「小池さん……。今日は新聞広告の更新でよかったですか？」

でも、今日は俺の体調面もある。無駄話はせずに、早速、本題に入った方が良さそうだ。

「そつそ、そうなのよう」 顔と腹を引いた小池さんはカウンター
の引き出しから、店舗型ヘルスの必需品、女の子を写真指名する客
に見せるアルバムを取り出した。

「あのスポーツ新聞にメインで載せてた子が辞めちゃってねえ。そ
れで……」

アルバムを開いた小松さんはページを捲る。俺は鞆からメモ帳を
出し、そのアルバムに目を落とした。どのページの子も、それなり
に可愛いけど、殆どの子がポニーテール。小松さん曰く、とりあえ
ずポニーテールの子、とリクエストする客が多いらしい。ロリコン
は不滅ってわけだ。小松さんのページを捲る手が止った。

「この子にしようと思ってるの」

メモ帳に走せていたボールペンを止め、はいはい、と濃い毛が生
えた太い指が座す写真を見下ろすと、すぐにメモ帳に戻った視線が、
え？ とまたアルバムに移った。

鼓膜を騒がすBGMと鼻から頭に抜ける消毒液の臭いが一瞬消え
たが、胸のム力つきは続いていた。

「どう思う？ 透ちゃん」 ルーズに髪を纏めた写真の子。

「あつ、えっ」

迂闊にも、ぎこちさなが口から漏れ、慌てて小池さんに顔を上げ
た。

「か、可愛い子ですね。いいんじゃないですか」

沈着を忘れない。

本音は口に出さない。

仮面は絶対に外さない。

仕事をしている時の俺の本分。パチンコ屋で働いていた時より大
人になっただけだ。俺が動揺？ 違うだろ。瞬きを繰り返して、

気を取り直してメモ帳にボールペンを走らせた。

「うふふふ。可愛い子でしょう。ナナちゃんっていうの。今週から入った新人さん」

ナナちゃん？ 違うだろ。メモ帳に書き込んだ「明日香」という名をボールペンで掻き消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9770y/>

露路(ろじ)

2012年1月12日20時50分発行